

# ワシントンマニュアル 第13版

The Washington Manual™ of Medical Therapeutics, 34th Edition

## 支持され続ける理由がある。

新刊

小手先ではなく 体幹を鍛える

“世界標準”の治療マニュアル **最新版**

指導医

オーベンが読み続け、

研修医

レジデントに読み継がれる

これぞ“マニュアル”



監訳

高久史磨

日本医学会会長/

自治医科大学名誉教授

和田 攻

東京大学名誉教授

- A5変 1192頁 図42
- ISBN978-4-89592-800-7
- 定価：本体8,400円+税



### ハリソン内科学 第4版

Harrison's Principles of Internal Medicine, 18th Edition

日本語版監修: 福井次矢・黒川 清

● 定価: 本体29,800円+税

絶賛発売中



### ハリソン内科学問題集 日本語版第4版完全準拠

Harrison's Principles of Internal Medicine Self-Assessment and Board Review, 18th Edition

日本語版監修: 福井 次矢・黒川 清

● 定価: 本体5,555円+税

MESI メディカル・サイエンス・インターナショナル

113-0033  
東京都文京区本郷1-28-36

TEL 03-5804-6051  
FAX 03-5804-6055

http://www.medsj.co.jp  
E-mail info@medsj.co.jp

**連載** [ネグレクトが疑われる事例の考察で臨床力をみがく]

全6回

## 気になる親子関係をみるコツ③

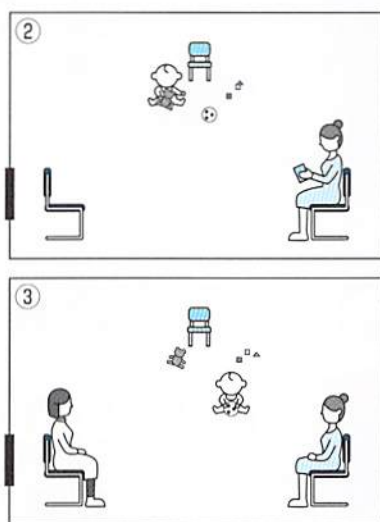
# 母親の幼少期の「甘え」体験

小林隆児 (児童精神科医/西南学院大学人間科学部社会福祉学科教授)

## 1. 新奇場面法 (SSP) から母子の心理を読み取る

前回 (No.4743) 示した新奇場面法 (strange situation procedure : SSP) での母子関係の観察から、そこにみられる母子双方の心理を読み取る際に重要なことは、子どもの気持ちと母親の気持ちに寄り添いながらみていくとともに、2人の間にどのような現象が生じているかをも丁寧に観察していくことであると述べた。なぜなら、母親自身が気づかないところで子どものことを大きく左右するような現象が起こっていることが少なくないからである。以下、具体的に解説してみよう。

### SSP②③から



子: 子どもは母親から数メートル離れた床の上で1人ミニチュアの電車で遊んでいた  
 母: 母親は椅子に座ったまま動かず、子どもの玩具遊びに付き合うこともなかった



つぶやくことで遠慮がちに母親を求めている

母親と2人有的时候、子どもはなぜか母親に視線を向けることも近づくこともなく、少し遠くから「デンシャ、デンシャ」と声を出している。遠慮がちに独り言のようにつぶやいて

いるが、母子双方の動きを見ていると、子どもはさり気なく母親に相手をしてもらいたいという思いを表していることを感じ取ることができる。筆者には母親の存在が気になって、子どもはとても1人遊びに熱中しているふうには見えないが、このときの母親の心理を想像すると、自分に興味を示さず、我が子は1人の世界で遊びに熱中しているように見えているのではなからうか。なぜなら母親は、この子が自閉症ではないかと小児科医に言われたことでの来院であったからである。



#### → 子どもの相手をすることが苦痛である

母親はずっと椅子に座ったままで、子どもが困惑して助けを求めているも、一向に手助けをしようとしな。さらには、子どもが怖い思いをして泣き泣き滑り台を滑ってきて母親にしがみついたにもかかわらず、母親は身体を仰け反らしている。いかにも抱きかかえるのが辛そうである。子どもはこうした母親の身体の変化を敏感に感じ取ったからであろう。子どももどこか遠慮がちでしっかり母親にしがみついていない。うつ状態である母親が、子どもの相手をすることが苦痛であることがこの一面によく表れていると思う。



#### → 母親の唐突な指示に子どもは容易に動かされる

子どもがさかんに遠慮がちに「デンシャ、デンシャ」とつぶやいていると、まもなく唐突に母親は子どもに滑り台で遊ぶように促している。先に述べたように、母親は子どもに何とかほかの遊びを促して1つのことに没頭しないように、との思いがあったのではない。しかし、子どもが1人遊びに熱中していたのではないことは、母親の唐突な促しにいとまたやすく動かされているところによく示されている。熱中していたならば、このように簡単に動かされることはないからである。いかに子どもがいつも母親の一挙手一投足を気にかけて、過敏に反応しているかをうかがい知ることができる。さらに子どもは、母親の促しに動かされるようにして滑り台に行く際にわざわざ遠回りしており、子どもが好きで応じているわけではないことがよく示されていると思う。



#### → 母親に怒りを向けることができない

子どもは母親の促しに従って滑り台に行ったが、滑り台の階段をうまく上ることができずにひどく困惑している。それにもかかわらず、母親は助けに来てくれない。子どもの心細さがいかに強いかわかりが想像できようが、さらに泣きながら滑った子どもに対して、なぜか母親は拍手をしてほめている。

ここで注目したいのは、心細いにもかかわらず助けに来てくれない母親に対して子どもは怒りを直接向けることがないということである。なぜかと言えば、1歳過ぎの子どもは自分1人では何もできない無力な存在で、絶対的に母親に依存しなければ生きていけない。それゆえ母親に見捨てられることを恐れているからである。我々はそのに子どもの幼げで健気な思いを感じ取る必要がある。



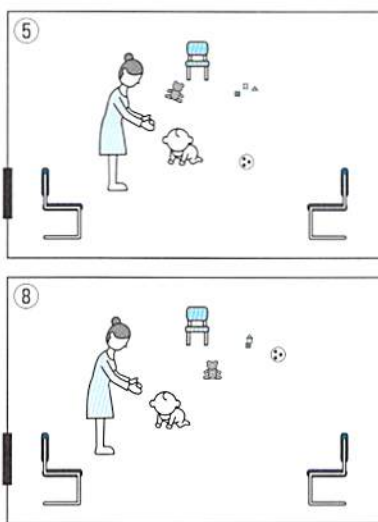
#### → 子どもにとって「デンシャ」はお守り

冒頭の2人での場面で、子どもは「デンシャ、デンシャ」とつぶやきながら手に持ってい



た「デンシャ」を、滑り台に行っても手放すことができなかった。それはなぜか。子どもは母親に相手をしてほしい(甘えたい)にもかかわらず、母親は一向に応じてくれない。子どもにとって「デンシャ」は容易に手放すことのできない唯一のしがみつく対象であったのだ。そう考えれば、子どもが母親の指示によってしぶしぶ滑り台に行って上ったとしても、「デンシャ」を手放すことなどできるはずはない。なぜならそれは、子どもにとって大切なお守りだったからである。滑り台に上ってどうしてよいか困惑していた子どもがお守りを手放してまで滑り降りたのは、切羽詰まって必死の思いでとった行動であろう。それに対して母親は拍手してほめているが、子どものころにどう響いたのであろうか。想像するだけで痛々しいものがある。

SSP⑤⑧から



子どもは母親とストレンジャー（ST）が入れ替わった際、母親に背を向けて遊びはじめ、また、ちらっと視線を向けた



母親を無視するようにして怒りを示す

しかし、子どもは子どもなりに母親に対して何らかの意思表示をしようと試みるものである。2回の母子分離後の再会場面にそのことがよく示されている。入室に気づいた子どもに母親が接近して目の前に来たときに見せた、母親を無視するような態度である。この反応は、我々日本人には馴染み深い「拗ねる」態度である。そこに子どもなりのかすかな抵抗をうかがい知ることができる。「甘えたくても甘えられない」子どもが親に対して「拗ねる」のはよくわかることである。

ただ、ここで注意してほしいのは、このような行動を子どもは意図してとっているのではないということである。思わずこのような反応をしているというのが実態だろうと思われるのである。

## SSP全体を通して



## → 母親の矛盾した働きかけと子どもの混乱

母親の子どもに対する何気ない働きかけには、いくつか気になる点がある。

1つには、母親は唐突に滑り台に誘ったにもかかわらず、滑ろうとする子どもに「デンシャ」を手放すように指示していることである。手に何かを持っていると危ないからという母親の思いはわかるが、子どもにとってこのときの「デンシャ」はお守りである。手放せるはずはない。母親の指示に渋々従って行動しながら、「お守り」まで取り上げられる。子どもの心細さは強まるばかりなのだ。

ついで、母親は抱きつく子どもを抱きかかえてはいるが、身体全体は子どもに対して仰け反るという矛盾した態度を取っていることである。子どもは母親が自分を受け止めてくれているのか否か判断できず、混乱してしまうのではないか。

さらには、心細くてしがみつくと子どもに母親はほかの玩具に注意を促して自分から引き離れたことである。子どもは母親の指示通り泣き泣き滑り台を滑って母親に慰めを求めてしがみついたにもかかわらずである。そしてこのあとすぐに、抱きついた子どもをほかの遊びに誘ったにもかかわらず、「壊したらだめよ」と注意して遊ぼうとする子どもの出鼻をくじいている。

これらの母親の働きかけには様々な矛盾を見てとることができる。子どもの意向を無視して動かそうとしてはすぐに子どもの動きを制止しようとする。あるいは、子どもの気持ちを受け止めようとして意識的には抱きかかえているが、身体は仰け反って拒否するような構えをとっている。筆者はここに母親の複雑な心理を感じ取ることができるが、子ども自身もどう振る舞ったらよいか、ひどく混乱していることが推測されるのだ。このような関係をみると、子どもの母親に対する「甘えたくても甘えられない」心理がより一層強まっていくことは容易に推測できるのである。

## 2. 母親自身の幼少期体験をさぐる

虐待臨床では、虐待された経験を持つ母親は子どもを虐待しやすいという「虐待の負の連鎖」がよく指摘されるが、この事例では母親自身どのような幼少期を過ごしたのであろうか。それをうかがい知る上でとても役に立つのがアダルト・アタッチメント・インタビュー (adult attachment interview : AAI) である。これは、成人を対象とした半構造化面接であるが、幼少期に両親との間でどのような体験を持ち、それが現在どのような形で記憶されているかを知ることによって、幼少期のアタッチメント体験の質を探ろうとするものである。

この面接で、母親は自分の幼少期を次のように語っている。印象的な箇所のみ取り上げよう。

筆者：「幼い頃のご両親との関係をお話して下さい」

母親：「父親の記憶はありません。5歳の頃、幼稚園に行くのが嫌でした。母親と遊んだ記憶もありません。母親は自分の習い事(着物教室や茶道)に忙しくて、あまり自分をかまう感じではなかったですね」

筆者：「小さい頃のご両親との記憶はあまりないですか」

母親：「ないですね。家族旅行とか行かない家だったので。でも、辛いことは覚えていますね。幼稚園の迎えが遅かったときとか、入園式でお母さんが帰っちゃったときに大泣きした記憶があります」

筆者：「小さい頃のお母さんとの関係を言葉で表すと」

母親：「『よく怒る』……兄とよく喧嘩をしては必ず2人ともスリッパで叩かれました。そういうパターンがいっぱいありました。」

『あまり仲が良くない』……嫌なことがあったときに母親に相談すると、逆に怒られるんです。だからあまり話せなかったですね。〇〇ちゃんにいじめられたって言ったら、そんなことたいしたことないって逆ギレされました。

『厳しい』……疲れたということは言っちゃいけないんです。僕は厳しかったですね。ため息つくな、泣き言も言っちゃだめ。厳しかったです」

筆者：「小さい頃、何かで動揺したときにはどうしましたか」

母親：「自分で解決していました」

筆者：「小さい頃、気が動転したときにどうしましたか」

母親：「泣いていたと思います。母親には放っておかれました」

以上の内容から、母親は幼少期に家族の温もりを感じたことはなく、心地よい「甘え」体験を持ったこともないことが伝わってくる。そのことが現在の母親にみられる子どもの「甘え」に対する否定的な態度によく反映されている。辛いことがあっても1人で耐えることをよとしてきた母親にとって、子どもが母親の手を借りずに頑張ることこそほめられるのであろう。心地よい「甘え」体験を持ったことのない母親にとってみれば、子どもを抱っこすることも、子どもにしがみつかれることも、身体が記憶していないために、心地よい体験となっていない。抱きつく子どもをすぐに引き離して遊ばせようとするのはそのためである。母親自身も自分の母親との間で「甘えたくても甘えられない」体験をしている。

母親も子どもを「甘えさせたくても甘えさせられない」のだ。「甘え」体験の質が親になったときに、このような形で母子関係に反映していることを我々臨床家は肝に銘じる必要があるのではないか。このように「甘え」を軸に母子関係を観察すると、いかに両者の間に複雑な心理が行き交っているのかが見えてくるのである。